

【優秀賞】

私たちの美しい地球

仙台市立郡山中学校
三年 菅原波瑠

私は去年の夏、家族で近くの港まで釣りに行きました。私にとって初めての釣りで、魚を釣るぞとワクワクしていましたが、柵越しに海を見てみると、そこにはたくさんのごみが浮かんでいました。カップ麺の容器やお菓子の袋、紙や割り箸などが大半です。その時のワクワクしていた気持ちも沈んでしまい、なんでこんなにごみがあるのだろうか？とそこに行くたびに思うようになりました。このごみは誰かが片付けない限りずっとそこに残ってしまう。そのままどうなってしまうのか。疑問に思い調べてみると、プラスチックは非常に安定性が高く分解されるには時間がかかるということです。一番分解されやすい「吸い殻」で一・五十年、身近なペットボトルは四百年、釣り糸に至っては自然分解されるのに六百年もの時間がかかるのです。私は、ペットボトルや釣り糸が人間の寿命の何十倍もこの地球上に残り続けると知り、とても驚きました。分解されることなく残りつづけるプラスチックごみが影響を与えるのは、海の生態系だけでなく、漁業やダイビングなどの観光業、私達の生活にまで及ぶことがわかりました。海の生物のプラスチック誤飲による命の危険、傷ついた魚が増え漁獲量が減る漁業、汚れた海での観光が避けられ収入が減っていく観光業。私が思っていた以上に海洋ごみの影響は大きく、深刻なものでした。

そのため、以前に家族旅行の際立ち寄った海で私はごみ拾いをしました。やはりそこにも少なからずごみは落ちていて、ネットやタバコ、メガネなどどれも身近なものばかりでした。改めて自分で体感し自分の目で見ただけで、より海を美しく守って行くために自分ができることから積極的に

にやっ行ってこうと思えました。

また、プラスチックが劣化し五ミリ以下ほどまで小さくなったものをマイクロプラスチックと呼びます。それを魚たちが食べ、私達が食べるまで残っていたとしたら。海に捨てられた物は巡り巡って自分たちのもとへ戻ってくるのです。そう思うと、海洋ごみの問題がいかに深刻なのかがよくわかります。海洋ごみが増えつづけることにいいことなんてないのです。

二〇五〇年にはプラスチックゴミの量が世界の魚の量を超すとも言われています。「まだ先の話だから」私はよくそのように考えてしまう癖があるのですが、まずその意識から変えていくことが必要だと感じました。海洋ごみ問題を今のこととして捉え、一人ひとりが少しずつ意識や生活を変えていかなければなりません。ごみはごみ箱へ、紙は燃えるごみ、プラスチックは燃えないごみ、当たり前に分別して捨てる。そんな小さなことを自分一人がやっても変わらない、そう思うかもしれません。でも、地球上にいるのは決して一人だけではありません。「塵も積もれば山となる」。どんな些細なことでも、やがては地球の未来を変えるのです。

海に住む生き物たちは声を上げることが出来ません。だからこそ、私達人間が気づき、行動し「今」を、そして「未来」を変えていくことが大切です。一人ひとりができること、小さなことから実行してみましよう。私達の住む美しい地球を永遠に、守って行くために。